慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	東北地方における晩期縄文時代の注口土器について
Sub Title	On the spouted vessels in the Kamegaoka Culture
Author	藤村, 東男(Fujimura, Haruo)
Publisher	三田史学会
Publication year	1972
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.44, No.2 (1972. 1) ,p.53(189)- 72(208)
JaLC DOI	
Abstract	It is well known in Japanese archaeology that potters of Latest Jomon Culture have produced various kinds of vessels, such as jars, bowls, plates, spouted vessels and so forth, especially in the Latest Jomon Culture in North Eastern Japan with the so-called Kamegaoka type of pottery. In this paper, the writer tries to work out the development and degeneration of the Kamegaoka pottery complex, focusing upon the integration and specialization of its' traits and taking up the spouted vessel as a typical example, which shows the most Complicated stylistic variations of shapes and designs among Kamegaoka pots. These spouted vessels can be classified chronologically into three subcomplexes; Early (Obora B and B-C type), Middle (OboraC_1 and C_2) and Late (Obora A and A'). The stylistic variation shows it's highest complexity in the Early subcomplex. As shown in Fig. 2, at least four characteristic vessel shapes can be seen among the spouted vessels. It is remarkable that all of the spouted vessels in the Early subcomplex have different shapes than those produced before and after the Early subcomplex, which tended to have jar-shaped bodies. In other words, the potter made primarily jar-shaped bodies in the preceding Later Jomon Culture, developed four new vessel shapes in Early and Middle complexs of the Latest Jomon Cultures and returned to the previous jar-shaped bodies in the Late subcomplex. It is clearly recognizable that this morphological change of vessel shapes is correlated with the developmental and degenerative trends of the Kamegaoka pottery complex as a whole. The writer suggests that this should be explained in terms of changes in the potters' productive system.
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19720100-0053

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

東北地方における晩期縄文時代の注口土器について

藤村東男

一、序

注口土器がはじめて学問的に論じられたのは、東京都大森貝塚の調査報告の時であり、そのなかで、モースは大森貝塚より出土した注口土器の形態の観察から、その用途として"Vessels with constricted necks, used as water"[1]と液体を取り扱う容器であることを想定した（Morse 一八七九 二八頁）。モース以降、全国各地で遺跡の調査がすすみ、それに伴なって多数の資料が発見され、注口土器の形態に種々あることが知られるようになった。このような状況のなかで、中谷治宇二郎（中谷 一九二七 三八頁）、杉山寿栄男（杉山 一九二八 一五一頁）は、それらの既発見の資料の聚成を行ない、それをもとにして形態、文様を中心とした考察を行なった。特に中谷は、従来ややもすると机上で論じられてきた用途、機能といった問題にはとらわれずに、注口土器自体の詳細なる観察に基づいて、型式、分布を明らかにするといった考古学的研究に欠かすことのできない作業に着手した点で、高く評価されるものである。その後は、各種の概説書等にお

いて必ずと云ってよいほど触れられてはいるが、特に注口土器を対象とした研究が十分論じつくされたとは必ずしも云えない。

そのようななかで、藤森栄一、武藤雄六（藤森・武藤 一九六三 一頁）と渡辺誠（渡辺 一九六五a 四六頁、一九六五b 一九六頁）らによる研究は注口土器の出現過程を理解するうえでも注目されるものである。藤森らは、中期縄文時代に存在する有孔鍔付土器をとりあげ、そこに見られる形態的特徴を基にして、後期の両耳ツボ、さらに注口土器へと系統関係がたどりうることを述べており、渡辺はさらに続けて注口土器が土瓶形注口土器から晩期初頭において急須形注口土器と細口ツボの二形態に器形分化することの可能性を指摘した。藤森らの考察は、注口土器の出現過程およびその用途的機能を理解するうえで、大きな視座を与えるほどのものであると云える。それゆえに、彼等の考察の拠りどころとなっている各種の土器の用途的機能に関しては、その復原が考古学的研究を行なううえでも欠かせない重要かつ困難な作業であり、それを行なうにあたっては十分慎重な配慮を必要としている。その用途的機能の復原という点について、藤森らは現

状において必ずしも十分な説明を与えているとは云えず、今後の課題として残されている。それは、勿論一挙に解決されるような性質のものでなく、多くの分析を積み重ねてはじめて成し得るものであり、筆者は、本稿において、その一端として渡辺が細口ツボとの器形分化の発生を指摘した晩期初頭の注口土器をとりあげ、それらの特徴、具体的内容を検討し、あわせてその背景となる晩期縄文土器の性格をはじめ若干の点についての私見を述べてみたい。なお晩期初頭の注口土器は、ほぼ東日本一帯に分布を見るが、主たる分布地域は東北地方であることから、本稿では、その対象を東北地方における晩期縄文時代に限定することとした。

二、注口土器の分類

注口土器の分類は古く中谷治宇二郎（中谷　一九二七　三八頁）と杉山寿栄男（杉山　一九二八　一五一頁）がともに形態的特徴をもとにして行なった。いま両者による分類について検討してみよう。

注口土器はかって土瓶形土器と急須形土器の二種の遺物として別個に取り扱われてきたが[2]、中谷はその二種は、形態の差であり、同種のものとして把握すべきことを述べ、把手、胴部、注口部などの形態的特徴をもとにし、それぞれの文様を加味することによって、それらをA～Dの四型式に分類した。A型は口辺の二ケ所、まれには四ケ所に相対した環状の把手を持ち、胴部が大きくて屈曲した平底となるもの、B型はツボ形を呈し所謂土瓶形と呼ばれるものの大部分を含む、C型は所謂急須形と呼ばれる胴部の屈曲した丸底となるもの、D型はC型の粗形で文様を欠くもので、これらは現在の知見によれば、A型が後期前半、B型が後期後半、C型が晩期初頭、D型が後期後半の時期に相当する。さらに中谷はそれぞれの型式の出土例数を集計し、A型は関東地方を中心とし、以下B型は関東及び東北地方、C、D型は東北地方とそれら四型式の分布を明らかにした。

ほぼ同時期に発表された杉山の分類は、中谷による四型式分類を踏襲したうえで、種々の形態変化を、単純なものから複雑な形態へと並べ、それぞれに前後関係を与えた。しかし、中谷、杉山の分類は、それぞれの型式に前後関係を与えたとは云え、形態分類に終始し、各型式の時間的関係が必らずしも十分把握されていたとは云えず、編年研究の進展した以後の縄文土器研究にあっては、文様的特徴をもとにしての土器型式の細分に主眼が置かれた結果、ほとんど顧りみられることがなかったのは止むを得なかったと云えよう。

なかでも東北地方晩期の急須形注口土器を中谷はC型として分類したが、その型式内での前後関係が不明確であるために、山内清男（山内　一九三〇　一三九頁）による大洞諸型式の設定をみた今日では、ほとんど通用する余地を残していない。しかし、結果的には否定されたとしても、中谷が土器の理解に形態的特徴を重視したことは、正当であった点を重視しなければならない。確かに土器型式の細分の基準により変化を鋭敏に反映すると思われ

る文様的特徴を用いることは有効であると云えるかも知れないが、土器はあくまでもそれぞれの容器としての性格を持つ以上、その理解にあたっては、文様は二次的なものと云わざるを得ない。それゆえ、そのような土器の持つ性格を反映するところの形態的特徴を軽視することは許されず、形態と文様とがそれぞれ意味を有する相互関係を基準としたうえでの分類を行なうべきことは明らかであり、いま中谷がC類とした晩期縄文時代の注口土器を通じて、晩期縄文土器の考察を試みる筆者にとっては、注口土器の分類基準として、形態的特徴をまず把握し、それに文様的特徴を組み合わせていく作業を通して、分類識別を行なう方法を採らざるを得ぬこととなる。

なお筆者の分類を記述するにあたって、土器の変化を表現する用語の説明を行なっておきたい。まず、土器の名称として「器形」「形態」「形状」の三段階の表現を行なうが、器形は鉢形土器、ツボ形土器などと云った、松本彦七郎、甲野勇らによって提唱された正方形九等分法に基づく土器区分の名称として用いる（甲野一九五三　九五頁）。ついで形態は細頸ツボ、広口ツボなどの同一器形内での変化を指し、形状は口縁、胴部などの状態を示すものである。しかし、これらの基準は適確に把握し得ない場合があり、その際には適宜緩和して用いていることを断わっておく。(3)

第一類

A（第二図8・9・10）　一ないしは四単位の小突起が貼付けられた内傾する口縁を持ち、肩の部分で盛りあがりを示す。その盛りあがった位置が胴部の最大径となり、偏平な丸底に連らなる。文様は口縁、頸部、肩部に施されるが、その施文される状態によって、㋑全面が無文となるもの（第二図8）、㋺特定部分のみに施文されるもの（第二図9）、㋩施文が全面に及ぶもの（第二図10）の三種に区分することができる。㋑は文様が全く描かれず、むしろ土器面を研磨することにもとづく装飾効果が認められる。㋺は注口部を中心として、その上下の位置に単独で三叉状入組文が沈刻される。なお底部は全面が無文となる㋑を除いて、㋺㋩ともに施文位置が注口部の直下に限定されている。

B（第二図12・13）　ふくらみをもって外反する口縁に一単位による小突起が貼付けられ、二段にわたってくびれた頸部を経て、Aと同様に盛りあがった肩部から偏平な丸底に続く。文様構成はAと類似するが、その㋩に見るような施文が全面に及ぶものは少なく、大部分は無文となるか、または注口部周辺のみに三叉状入組文が描かれる。

第二類

A（第二図11）　第一類Aと同じく一単位による小突起が貼付けられた口縁が内傾し、偏平な肩部に続いている。形態は全体として第一類Aを押しつぶした感じのものとなり、文様帯の上下の幅が縮少する傾向が認められる。頸部文様帯には器面を一周して、シダ状文の文様帯がいくつか重なりあって施文されるが、底部のみは注口部の直下に限定される。

B（第二図14・15）　ふくらみをもって外反する口縁をもち、二段にわたって頸部がくびれることは第一類Bと同じであるが、肩部の屈曲の状態で第一類Bとは区別される。それは第一類Bが直立した頸部から丸味を帯びて盛りあがった肩部に続くのに対して、本類は、頸部が内弯し、偏平な肩部に連らなる点に両者の差を見い出すことができる。さらに本類は頸部が上下に広がる傾向をみせ、頸部文様帯が主要な施文位置となる。ここには浮き彫り的にK字状文、C字状文が施される。なお口縁直下には数本平行沈線がめぐり、その間に変形されたシダ状文が描かれる。

第三類

B（第三図16・17）　形態的には第二類Bに近似するが、口縁と頸部との屈曲が急角度となり、さらに口縁に装飾性豊かな王冠状の突起が付くことによって、第二類Bとは区別される。くの字状に屈曲した頸部、肩部と浅い皿形の底部とがあいまって、晩期の注口土器ではもっとも偏平な形態を呈する。胴部上半部と下半部との境になる肩部には、小刻みな沈刻を施した突起状の装飾が見られる。文様は主として頸部に集中し、磨消縄文によるx字状文がめぐるが、磨消縄文を用いず、縄文の施文される位置を研磨する場合も認められる。底部文様は注口部基部を中軸線として、ほぼ左右対称に変形したx字状文が全面に施こされ、ただ底部中央のみが研磨される。

C（第三図18）　外反する口縁に王冠状の突起が貼付けられる点は、Bと同じであるが、頸部が直立し、胴部の張ったツボ形に近い形態を示す。頸部は無文となるが、胴部には磨消縄文によるx字状文がめぐらされる。

第四類

B（第三図19・20・21）　口縁にはキザミが施され、その上に小突起が付けられ、口唇部及び口縁内側には一条の沈線がめぐる。口縁よりわずかに内弯する頸部を経て、丸みを帯びた円底に連らなる。頸部と底部との接合部にあたる肩部には、両者の接着を容易にする目的で、粘土紐が接合部を包む状態でまかれ、特に注口部の基部には、ヒサシ状の角ばった形で粘土紐が付けられる。肩部にまかれた粘土紐にはキザミが付けられ、突起が貼付けられている。口縁直下には沈線がめぐり、その下の頸部文様帯には、はちまき状の磨消縄文が施文される。底部は第三類Bと同じく、変形されたx字状文が左右対称に描かれる。なお底部が円底とはならずに、磨消縄文による雲形文を施文した平底となるものも知られている。

第五類

C（第三図22・23）　キザミ隆帯のめぐる口縁から、細くくびれた直立する頸部を経て張り出した胴部に続く。底部は四つの突起（四足）のついた平底となる。頸部は無文となるが、胴部には浮き彫り的に工字状文が施文され、胴部の最大径となる位置に、口縁と同じくキザミ隆帯がめぐる。

以上晩期の注口土器を第一類より第五類までの五類型に識別し、それぞれの形態、文様の特徴を述べてきたが、いまこの五つの類型について、文様を基準として東北地方晩期縄文土器の諸型式に対比してみると、まず第一類は口縁の形状差によってA、Bの二形態のあることが知られるけれども、その両者は口縁以外の形態、文様のうえで多くの共通性を有しており、同一類型内の形態変化として認めることができる。したがって両形態とも沈刻による三叉状入組文、C字状文、渦巻文を主文様としていることから、大洞B式に対比されるものと思われる。なお本類には、施文の状態に三種あることを述べたが、その三種の関係を検討してみると、まず第一類に前後する後期終末の注口土器と第二類以降では、前者が無文となり、後者は全面に施文されるものが多いことから、無文となる㋑がもっとも古く、全面施文となる㋩が新しい傾向のものと思われ、㋑→㋺→㋩の順に施文部位が順次拡大していったものと理解することができる。

第一類に後続するものとして第二類をあげることができる。第二類の形態は、第一類のそれと多くの親縁性を有するものであることは明白である。即ち、第二類Aの形態は第一類Aの、第二類Bは第一類Bの伝統を引くものであることが認められ、第一類と第二類との相違する点は、頸部の傾きが強くなる点に加えて、文様表出の方法に求められる。それは第一類においては、施文が沈刻によってなされているのに対し、第二類は同じく沈刻によりながらも、その沈刻は文様を浮き立たせるためのものであるから、文様としては所謂陽刻文と呼ばれるべきで、このような本類の時期比定は、主文様のシダ状文、平行沈線からして大洞B－C式とされるのであるが、本類の分布範囲が東北地方全般にわたらず、北半に限定されるらしく、東北地方を通じての独立した一類型とするには、疑問が残される点を指摘しておきたい。なお胴部に描かれたシダ状文によって、大洞B－C式に対比されているものとして、青森県八戸市是川遺跡出土品（芹沢長介　一九六〇　二〇九頁　七四図九）の如きツボ形を呈する形態のものが存するが、A、Bの出土例に比べて量的にもわずかであり、またその分布も明らかではないので、本稿では除外することとした。

第三類はx字状文を主文様とすることで、大洞C_1式にあたることは明らかである。既述したように第一類、第二類には、口縁の形状差に基づくA、Bの二形態が存在しているが、本類においてはAに相当する口縁が一段で内傾するものは、ほとんど見受けられず、急須形を呈するものは、Bの一形態に限定されることが、とくに注目される。口縁突起及び頸部のはちまき状の磨消縄文によって第四類は、大洞C_2式に対比される。なお第四類には胴部上半部は共通しているものの、肩部以下の状態が丸底を呈するものと、平底となるものとの二種類が存在するが、前述したように第一類から第三類に至るまでの土器は、いずれも底部は丸底でなって、平底は含まれない。これに対し、第五類が全て平底となることから、この二種の底部のうち丸底を呈するものが先行し、平底は若干遅れて出現するものと考えられ、晩期中葉から終末にかけ

て、注口土器の底部が平底となる事実を示しているものと思われる。なお例数が少ないが、岩手県岩手郡ながほら遺跡出土品（芹沢　一九六〇　二一七頁　七八図九）に見られるように、ツボ形土器の胴部上半部と、第四類注口土器の胴部下半部（平底）が接合されたような形の例があるが、形態的には第四類と第五類の両類の特徴を持つ中間的なものと云えよう。

最後に第五類は、浮き彫りによる工字状文をもつことから、明らかに大洞A式に対比されるが、従来中心的な形態であった急須形が姿を消し、ツボ形を呈するもののみとなる。第五類は一～四類と比較して、出土例が少ないが、大洞A′式に比定されるものは、さらに減少し、わずか数例の出土が伝えられているにすぎず、しかも、それらはいずれも注口部のみの破片であり、全体の形態を知り得ないので、本稿では取りあげず将来の良好な資料の出現を待ちたい。

以上によって晩期の注口土器は、第一類が大洞B式、第二類は若干疑問が残るが大洞B－C式、以下第三類は大洞C_1式、第四類は大洞C_2式、第五類は大洞A式とそれぞれ大洞諸型式に対比されることが明らかになった。これらの各類型は、その形態的特徴によって概観すると、急須形と呼ばれる独自の一形態を呈し、複数の形態変化を示す時期（第一類、第二類）、急須形は一形態に限定されるが、他にツボ形を呈する形態を含む時期（第三類、第四類）、そしてツボ形となる時期（第五類）の大きく三つの時期として把握することができる。なかでも第一番目の独自の形態をとる時期は、晩期の注口土器の出現を検討するうえでも興味深い時期であり、後段において後期の注口土器との関連を含めて、さらに取り上げてみたい。

三、晩期初頭における形態的特徴

晩期の注口土器が初頭において急須形と呼ばれる独自の形態を呈することは前に述べたが、そのような独自の形態の出現の過程を知るうえで、後期後半の注口土器の形態が改めて注目されねばならない。後期後半の注口土器は現状において、その内容が十分に把握されているとは断言しえないが、現在までに公表された資料に基づいて検討を行なうと、それらは形態、文様の面で次ぎの三類に区分することができる。

A類（第一図1・2）　磨消縄文による入組文を主文様とするもので、口縁の形状は㋑平縁のもの、㋺七から九個の小突起を有するもの、㋩四個の大突起と四個の小突起を交互に貼付けたものの三種の存在が認められる。しかし、この三種ともに口縁以外の形態について見る時は、多くの共通性をもち、口縁から頸部にかけては直立もしくは、わずかに丸みを帯び、球体に近く張った胴部に連らなり、径三センチメートルほどの小平底となる。口縁頸部には縄文帯が数条めぐり、胴部にはもっとも張り出した位置に注口部を含めて四個の小突起が貼付けられ、その突起と突起の間に磨消縄文による入組文が施される。

B類（第一図3）　ハリコブ突起が主要な文様要素となるもので、

口縁はA類と同様に平縁をなすものと、小突起を配するものの二種あるが、両種ともに直立した頸部を経て球体の胴部からすぼまった感じの円底に連らなる。頸部には細い粘土紐ないしは沈線が数条横走し、その粘土紐、沈線の上にハリコブ突起が付加される。胴部にはハリコブ突起とともに沈線による入組文が描かれる。

C類（第一図4・5・6）　全面にわたたって文様を施さないもので、口縁は一段あるいは二段にくびれ、いずれの場合も平縁となる。胴部はくの字に屈曲し、その屈曲によって胴部は上半部と下半部に分けられている。底部は中央がへこんだ丸底となり、ホーデン状突起が注口部基部に付けられる。

以上A、B、C三類の特徴を述べたが、それぞれの前後関係は、胴部が屈曲し、底部が丸底となるC類が三者の中では、もっとも前述した晩期第一類に近く、新しいものと云える。残るA、B類は形態が類似し、両者の特徴的文様である磨消縄文と、ハリコブ突起とが同一個体内で併用される場合があることから、ほぼ同時期か、底部が丸底となるB類が平底であるA類よりも若干新しいものかと思われる。以上によってA・B→Cという前後関係を定めることができ、それを基礎にして今一度、後期後半の注口土器に認められる諸特徴をまとめてみると次のようになる。

(a)、後期後半の注口土器はもっとも新しいC類を除き、胴部が球体に近く張ったツボ形を呈し、同じ後期後半のツボ形土器と類似した形態を示す。とくにツボ形土器との区別が注口部の有無でしかなし得ないような極めて酷似したものが数多く見受けられる。

(b)、後期後半の注口土器にはA類では磨消縄文、B類にハリコブ突起が多用され、同時期のツボ形土器と同じ文様構成をとることが指摘される。

(c)、口縁及び胴部に突起が多数貼付けられる。

(d)、胴部の文様は入組文を中心として施文が行なわれている。その文様を観察すると、器面に同じ文様が何回か繰り返し施文されていることが認められる。そのような同一文様を繰り返す回数は、同類型の土器では特定な回数に集中する傾向が見られ、A、B両類では四回の場合が多い。

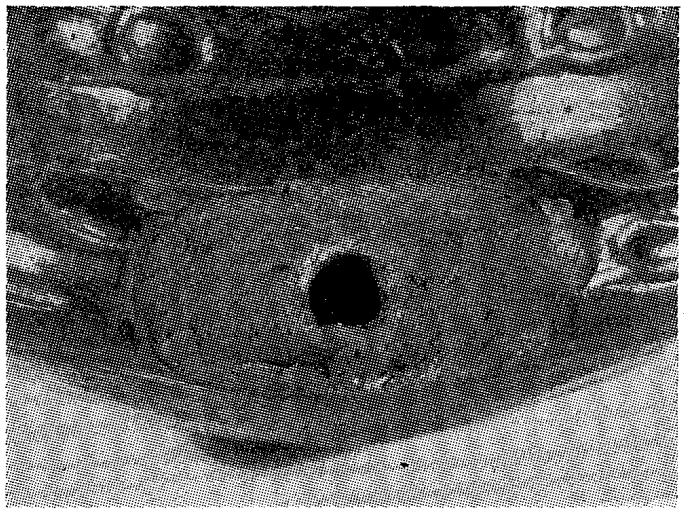
後期後半の注口土器には以上のような特徴が認められるが、これを前述した晩期初頭の第一類、第二類と比較すると、以下に述べるような差違が認められる。

(a)、第一類、第二類とも大部分の形態は急須形と呼ばれる独自の形態であり、ツボ形を呈するものは稀にしかない。

(b)、施文にあたっては、縄文を文様要素として用いることはなく、沈刻、陽刻が主要なものとなっている。なかには更に研磨あるいは漆を塗ったものも見受けられる。

(c)、突起は口縁に限定され、頸部以下には一切付けられない。

(d)、後期後半の注口土器では同じ文様が繰り返して施文される場合、その回数が四などの特定数に集中することはすでに述べた

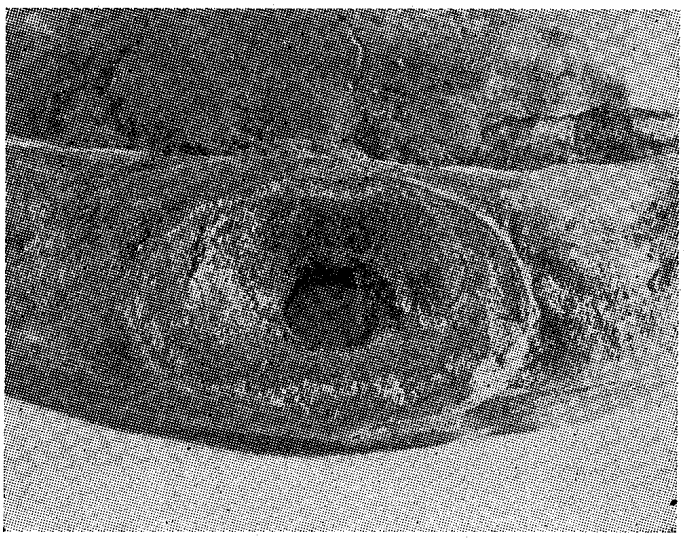


接合部の状態（A型）

が、第一類、第二類には特定数の集中は認められない。

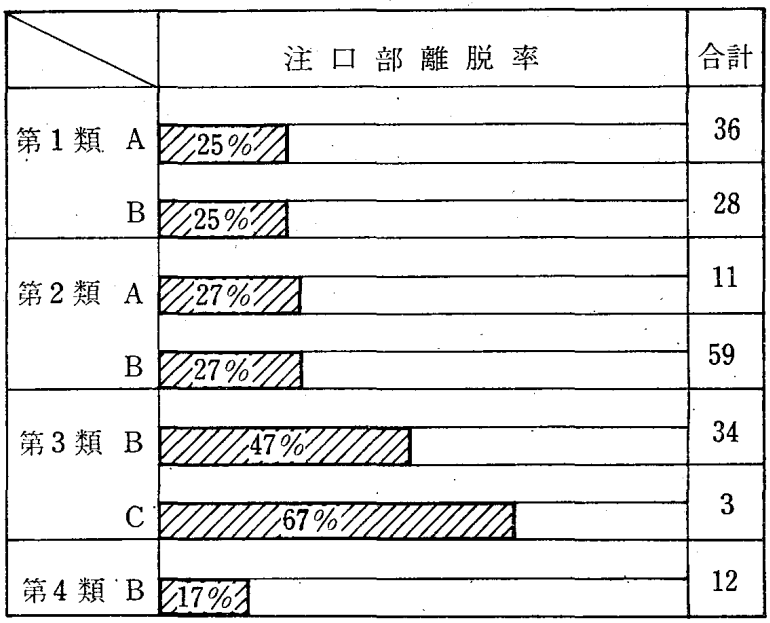
以上のように晩期初頭の第一類、第二類は、それ以前の後期後半に認められたいくつかの要素が消失しており、それに代って独自の様相を強く発揮している。以下後期後半の注口土器との間に見られる相違点について、更に詳しく述べてみたい。まず形態的特徴の面から見ると、前述したように後期後半は、いずれも頸部が直立し、胴部の張った形態であり、同時期のツボ形土器との区別は、わずかに注口部の有無でしかなし得ない。両者の判別の基準が、注口部の有無であることは、少なくとも注口部の成形以外の面では、全く同一であり、換言すれば注口部接合までの工程が同一の principle で行なわれたことを示している。実際に、注口土器とツボ形土器の胴部及び頸部の屈曲したところを観察してみると、両者とも同じ方法で粘土紐を積みあげており、そのことからツボ形土器と注口土器とが、同時に製作されていた可能性のあることを認めることができる。しかし、晩期初頭においては、胴部の張った丈の高いツボ形土器に対し、頸部が大きく屈曲した所謂急須形と呼ばれる独自の形態をとる注口土器とでは、両者がたとえ破片の状態にあっても識別することが容易であり、後期後半に見られたようなツボ形土器との形態の類似は認められず、両者が明白に異なることを指摘しておきたい。このように晩期初頭において注口土器がツボ形土器とは異なった形態をとり、独自なものを発揮していることは、同じ東日本晩期縄文土器として、多くの共通性ゆえに包括されている関東地方の晩期縄文土器にくらべて異なった様相として認めることができる。関東地方の安行系諸型式に伴なう注口土器は、一部の東北地方からの移入品、もしくは模倣品を除いては、依然として他の器形（関東地方ではツボ形土器は稀であり、この場合には平縁深鉢形の枠状文系土器を指す）。と同一の形態であり、東北地方に見られるような独自の形態の出現が認められない（藤村東男　一九六八　二一頁）。上述したように晩期初頭の第一類、第二類は、東北地方の後期後半とも、また関東地方の晩期初頭のそれとも、時間、空間の両面にわたって様相を異にしており、いずれの場合においても、独自の形態を保持していることが顕著な特色として指摘される。そのような様相の晩期初頭の第一類、第二類には、既述したようにその出現当初より、口縁が内傾し、肩部に直接連らなるA型と、口縁が外反し、二段にくびれた頸部を経て肩部に続くB型という口縁形

状の差に基づく二形態の存在が指摘される。いま両者を観察すると、次に述べるようにA、Bの二形態に注口部接合方法の差があることが認められる。注口土器の製作は、粘土の性質上、主体部と注口部を同一工程内で成形することが困難であるために、両者は別途に成形され、後に注口部を本体に接合する方法が採られる。それゆえに注口部の接合を行なう時期と方法は、注口土器の製作工程のなかでも重要な意義を帯びていると云える。まず注口部の接合の時期は本体部及び注口部の成形後であることは勿論であるが、その時期を文施様文が行なわれる時期と比較してみると、注口部接合前に施文が行なわれたことを示すものと、接合後であることを示すものとの両種の資料が存在することによって速断は危険であるが、後者の接合後に施文が行なわれたとする資料のほうが多いようである。次いで注口部の接合については、接合の状態を注口部の離脱した資料において観察することができる。それによると写真で示したように、A型はその接合部の状態がほとんど平面に近いものであり、これに対してB型では中央部の孔の周辺が円錐状にケズリ取られていることが認められる。注口部の接合は本体部作成後、胴部（晩期注口土器にあっては肩部）に穿孔し、既に作成されている注口部を穿孔位置に貼付ける状態で行なわれる。A型に認められる肩部が平面的な状態であるのは、注口部を直接貼付けた結果と解することができる。これに対し他に例を見ないB型の肩部がケズリ取られているものは、注口部が離脱する際に隅然にけずり取られる可能性も考えられるが、中央部のへこんだ面に指紋が付着している資料（青森県八戸市是川遺跡、登録番号一〇九―四三）があることから、すべて偶然の所産とすることは困難である。さらに、このような状態となっているものが特にB型に多く認められることは、B型の接合方法がA型のそれとは異なっていることを示しており、その場合想定できる方法として、肩部をケズリ取ると共に、注口部基部を細くし、中にはめこんで接合する方法がある。ところで、この想定の当否はその対象となる本体部の接合部とともに、本体部より離脱したところの注口部の観察を必要とするが、注口部に関して充分確認しうる資料に恵まれない今日においては、接合方法の断定は避け、想定の段階にとどめておくのがよかろう。しかし、土器面の観察によって明らかに異なる状態が認められ、それぞれが異なる形態と結びついていることを重ねて指摘しておきたい。さらに接合部に見られる二つの様相が接合



接合部の状態（B型）

方法の結果を規定していないことを付け加えておきたい。青森県是川遺跡からは、両種の状態を示す多数の資料が出土しているが、これらの資料を基にして注口部の離脱した例数を集計した結果、離脱している例数の全体に占める割合は、A、Bいずれの場合も二五％前後で、ほとんど一定していることが判明した。注口部が離脱する原因には種々の状況を考慮しなければならないが、その離脱率が一定していることは、接合部の状態の差が、必ずしも接合強度の差としてみなされるものではなく、またA、Bいずれかの接合方法が、より効果的であるとも云い切れないことを示している。



注口部離脱率　（資料：青森・是川遺跡）

第1表　注口部の離脱率

晩期初頭のA、B両形態には、上述したように形態の差違と結びついて注口部の接合方法にちがいが認められるが、その要因は時間、空間のいずれかの差として考えられるであろう。まず時間差に由来するものと考えた場合、文様のうえで、A、Bがともに第一類では沈刻による三叉状入組文、第二類が陽刻によるシダ状文、K字状文を主文様としていることから、第一類、第二類には前後関係を認めうるが、A型、B型が同時に存在していたことを推さしめる。また形態の面から第一類A↓第二類A、第一類B↓第二類Bと、いずれの形態においても、その過程に双方を介在させることなく、A、B別途に変化したと説明することができ、ことさらA型とB型を時間差とする理由は無い。次いで分布する地域の差として把えると、第一類の場合、B型は青森、秋田、岩手北部の所謂東北地方北半部に集中するが、A型は北半を含めた東北地方一円にその分布を見る。また第二類の場合、東北地方南半部には、あまり見かけられず、A、B両型とも東北地方北半に限定される。以上の結果は、第一類Aのみは南半にも分布を見るが、その他はいずれも北半に集中することとなり、A、Bの両形態は必ずしも時間差及び空間差で説明されるものではないことを認めざるを得ないのである。A、Bの両形態が同時に存在している東北地方北半においては、それぞれの形態と、両形態に固有の接合

方法とが結びについて、他はあまり例を見ない複雑な様相を示している。このような技術的制約の結果によって全てを説明することはできないけれども、それぞれの接合方法と、二つの形態とが融合することなく結びついていることは、偶然の結果として理解することは困難であり、そこに土器製作にあたっての一定の規則、約束に基づいて両者が明確に区別されつつ製作されたとすることは、あながち無謀とは断じえないと思われる。

第2表

東北地方　南半部	東北地方　北半部
第１類Ａ	第１類Ａ，第１類Ｂ ↓ 第２類Ａ，第２類Ｂ

四、晩期初頭における器面装飾

晩期初頭における形態が、後期後半の様相とは大きく異なり、独自の展開を示すことは前に述べたが、形態的特徴よりも、さらに顕著な変化が器面装飾のうえに認められる。以下文様施文の方法を主としてやや詳しく述べると、後期末から晩期初頭にかけて、一部器面に文様が施されず無文のままのものがみられることは、比較的スムースにその文様の脈絡を求めることができる晩期縄文土器のなかでは特異な存在といえる。（後藤勝彦　一九六二　三七頁・安孫子昭二　一九六九　八七頁）次いで無文のものが減少し、再び文様施文が行なわれるようになると、はじめは文様が全面に及ばず、口縁突起以下底部文様に至るまで、その旋文の位置は、注口部周辺に限定され、注口部を正面に向けて置いた場合、正面から目に触れる位置だけに施文を行っている。（第二図9・13）注口部を中心にしたところの正面性（Frontality）を持つこのような装飾法は、縄文土器には通常見られず、わずかに一部中期のそれに見られるものである。（清野謙次　一九六九　三六七頁）なお注口部周辺に集中して施文される文様は、注口部を軸線として左右が対称となっているが、このように左右対称に文様を施文する例としては、他に土偶、土版、岩版、土面などの特殊な遺物にのみ見られるようである。

注口部周辺に限定されていた文様が、やがて横位に拡大し、器面を一周して施文が行なわれるようになると、その文様は後期後半の注口土器と同じように、各文様帯に同一文様を数回繰り返す器面装飾となる。その繰り返しの状態を観察すると、繰り返えされる回数（以後その回数を文様単位数と呼ぶ）は、後期後半には見られなかった五回以上にも及ぶものが出現している。このように他にあまり例を見ない施文の方法を吟味すると、施文を行なう前に、あらかじめ文様帯をそれぞれの文様単位数で分割した後に、区画された部分の中に同一の文様をあてはめて施こす方法が考えられる。以下その分割方法の吟味を述べると、

(イ)　後期後半の注口土器においては、あらかじめ文様帯を分割した上で、同一文様を割りあてており、その基点とか中心となる位置に突起が貼付けられている。分割にあたっての基準として、同一の文様を繰り返す回数が考えられ、その結果として同一類

単位数	後期後半	第1類 A	第1類 B	第2類 A	第2類 B
1		11 (35)	5 (100)		1 (2)
2		3 (9)		1 (10)	1 (2)
3	2 (13)			1 (10)	1 (2)
4	11 (73)	6 (20)			22 (37)
5		2 (6)		1 (10)	2 (4)
6		3 (9)		1 (10)	2 (4)
7	1 (7)	3 (9)			3 (5)
8	1 (7)			1 (10)	4 (7)
9		2 (6)		2 (20)	3 (5)
10		1 (3)		1 (10)	3 (5)
11					3 (5)
12					
13					1 (2)
14		1 (3)		1 (10)	1 (2)
15				1 (10)	1 (2)
16					
17					
18					1 (2)
19					1 (2)
20					2 (4)
21					2 (4)
22					2 (4)
23					
24					
25					
合計	15 (100)	32 (100)	5 (100)	10 (100)	56 (100)

( ) 内はパーセンテージ

第3表　頸部における文様の単位数

型の土器であれば、施文される文様が共通であるとともに、その繰り返す回数も一致し、四回となるものが多い。それゆえに繰り返す回数に一致が認められるか、否かはその分割方法を考えるうえで重要な意味を持つ。そこで第一類、第二類に見られる繰り返しの回数を検討すると、単位文様の共通性は認められても、その繰り返しの回数は一定の数値に集中しないで分散する傾向を示す。

次いで文様をあらかじめ分割したうえで施文する方法は、多くの場合その分割することが一文様帯に限られず、分割は上下の文様帯にも及んでいる。したがって同一個体の土器では上下の文様帯の分割数に一致が見られ、さらにその基点、中心となるべき位置に対応関係のあることが認められる。その際、上の文様帯の分割数が四であれば、下の文様帯のそれを八にするような、一部文様帯を再分割して、上下の文様帯の分割数に倍数関係が認められる場合もある。ところが第一類、第二類の同一個体内での各文様帯の分割数を検討すると、同一個体であっても分割数の一致は見られず、さらに七、十一、十三といった倍数関係を持たない素数が含まれることから、同一文様帯を再分割した可能性も考えられないこととなる。

単位数	口縁	頸部	胴部
1			
2			
3		2 (13)	
4	11 (68)	11 (73)	32 (70)
5			8 (18)
6			1 (2)
7	2 (13)	1 (7)	1 (2)
8	1 (6)	1 (7)	3 (6)
9	2 (13)		1 (2)
10			
合計	16 (100)	15 (100)	46 (100)

( ) 内はパーセンテージ

第4表　後期後半における文様の単位数

(ロ) 以上の結果、第一類、第二類には、後期後半に認められた特定分割数を基準とした文様帯分割によっての文様施文は否定せざるを得ない。ところで分割の基準として、特定分割数以外に、もうひとつ文様一単位の横巾が考えられる。これは文様帯の全周と文様との間に、全周＝文様一単位の巾×文様単位数の関係があり、文様一単位の巾によって分割数が規定されるからである。この場合には全周と文様一単位の巾とに正比例関係が成立しなければならないが、いま両者の計測を行なって相関グラフを描くと、表6に示したように数値は分散し、両者間に特定な比例関係を認めることは困難となる。ゆえに当初考えたような文様一単位の横巾を基準としての分割が行なわれたとする想定が成立する余地は少ない。

以上の二点によって、このような数多くの繰り返しによる文様

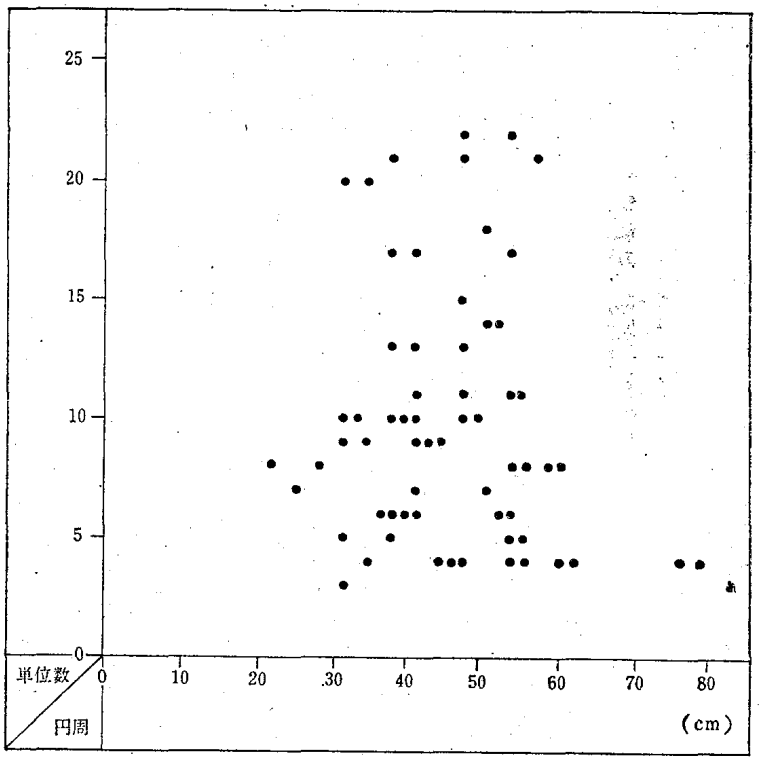
施文にあたって、分割数あるいは文様一単位を基準としての分割方法の存在は考え難い。たとえ何らかの基準が存在しているとしても、それは個々の土器によって異なったものであり、その点では同一の原則にのっとっている後期後半の注口土器とは明らかに区別されるべきものである。なお一言付け加えておくと、前述した後期後半に突起が多く用いられ、各文様の基点、中心の位置に貼付けられていることは、このような各種の突起が文様施文にあたって、同一の文様を繰り返して施文するためには欠かせない存在であった事実が注目され、特に口縁にある突起は、多くの場合、口縁以下の胴部などに施される突起、文様の位置と一致しており、これらの位置を決めるうえで重要な働きを有していたことが認められる。（山内　一九六四　一五七頁）したがって晩期初頭において、口縁部以外に突起が貼付けられていないことは、文様施文にあたって、特定数による分割が行なわれていなかったことを、暗示しているものと思われる。

上述したように、後期後半の文様施文を、あらかじめ特定数で分割し、それによって、区画

単位数	口縁	頸部	肩部	底部
1		1（2）	2（5）	
2		1（2）	2（5）	40（95）
3		1（2）		
4	4（29）	22（37）	9（21）	2（5）
5		2（4）	4（10）	
6		2（4）	5（12）	
7		3（5）		
8	9（64）	4（7）	5（12）	
9		3（5）	3（7）	
10		3（5）	5（12）	
11		3（5）	1（2）	
12				
13		1（2）	3（7）	
14		1（2）	1（2）	
15		1（2）		
16				
17			2（5）	
18		1（2）		
19		1（2）		
20		2（4）		
21		2（4）		
22		2（4）		
23				
24				
25	1（7）			
合計	14（100）	56（100）	42（100）	42（100）

（　）内はパーセンテージ

第5表　第2類Bにおける文様の単位数



第6表　第2類Bにおける頸部文様の円周と文様単位数

された位置のそれぞれに、同じ文様をはめこんでいく施文方法であると認めるならば、それはあらかじめ文様帯を分割することによって、器面に文様の基点となる座標が与えられ、その座標をもとに誰でもが、容易に施文を行なえる方法と云える。そのような誰でもが同じパターンで施文を行ない得る方法である上に、このように施文方法の細部にまでも統一的な規則が存在するからには、たとえ多くの人々によって施文が行なわれたとしても、その規則に従うことで、一定の水準を保った結果が得られるわけであり、すぐれた方法と云える。これに比べて、同じ繰り返し施文でありながら、特定の分割方法が見いだせない晩期初頭の施文は、個体による変化が大きいことと、さらに統一的な規則が認められない点で、一般性を帯びた方法とは云い難く、施文方法としては多くの面で、施文を行なう者の技術の程度によって、その出来あがり方が左右されるわけであり、一般的と云うよりはその判断が製作者に委ねられた個人的な方法と云わざるを得ない。このことは、その文様の出来あがりが同一地域内での資料であったとしても、同じ程度にはならないことを意味しており、青森県東津軽郡宇鉄遺跡出土の資料のなかに、同じ型式に属するものでありながら、かなり異った作風を認識することができるという指摘（清水潤三　一九六六　三五頁）は、このような施文方法の様相を反映するものとしても理解しうるのである。

五、結　語

晩期初頭の注口土器が後期後半の延長線上にあることは、種々の点で明らかであるが、既述したように、後期後半とは必ずしも全部が一致しているのではなく、形態、文様の面で、以下に述べるような相違があることを指摘し得るのである。それらをまとめると、第一に後期後半においては同時期のツボ形土器と、形態、文様のうえで多くの共通性を有しており、注口部の接合を除くと、全く同一のプリンシプルで製作されたことが了解される。とこ

ろが晩期初頭においては、急須形と呼ばれる独自の形態が出現して、ツボ形土器とは形態の分離が行なわれたことを認めることができる。第二に文様施文において、単位文様を繰り返えす際の基準が、個体ごとによって異なり、後期後半に見られた特定数値を用いての分割施文方法は認められない。その場合の施文方法は、その判断が施文を行なう者に大きく委ねられた個人的なものと云える。第三に、口縁形状の異なる二形態が、東北地方北半部に同時に存在し、それぞれが技術的制約によって全てを説明することのできない固有の注口部接合方法を保持していることが認められる。

以上述べたように、晩期初頭は、後期後半とは形態、文様、施文のうえで、明らかに異なったものとして認識する必要があると思われ、その両者間に見られる差異は、後期後半から引きつがれたいくつかの伝統が、晩期初頭において断ちきられていくといった、伝統の断絶として規定しなおすことができる。なおここで問題となることは、このような土器の変化に示された伝統の断絶として規定したものから、いかなる展望のもとに、いかなる歴史的意義を把握しえるかという点である。この点に関してはかかる研究によって今後どのような展望を持ちえるかについて述べることによって、筆者の理解の内容を示しておきたい。そこで注目されるのが、第二にあげた後期後半から晩期初頭にかけての土器面に表わされた文様の差異が、両時期における施文方法の変化という解釈に止まるものではなく、施文を行なう際の技術がいかなるかたちで存在したかという問題として捉えられることである。云い換えれば、施文をはじめとする土器製作にあたって駆使される技術を、誰がどのような状態で保持していたかという、いわば土器製作の社会的状況の問題へと発展していく可能性を見いだすことができるということである。これはかって甲野勇が、縄文土器の研究課題として指摘した、（甲野　一九五三　一五四頁）土器つくりにおける特定の技術者の存在の可能性に応えるものであり、その存在の可能性を考察するにあたっての具体的なアプローチを得たのではあるまいかと感じられるのである。

終りにのぞんで、本稿を作成するにあたって有益な御教示をたまわった赤沢威、林謙作の両氏をはじめ、資料利用の便宜を計られた青森県八戸市教育委員会、明治大学文学部考古学研究室、東北大学文学部考古学研究室、東京大学理学部人類学教室の各位に深く感謝の意を表するものである。また常に理解ある援助と助言を惜しまれなかった清水潤三、鈴木公雄両先生をはじめとする本塾文学部考古学研究室の各位に対しても厚くお礼を申しあげる次第である。なお本稿の浄書には小宮孟・町田則子両君の助力を得たことを銘記して感謝の意を表したい。（一九七一　一〇　稿）

註

（1）　矢田部良吉の邦訳では「注口」を、現在の注口土器よりは広い意味で用いており、ツボ形土器がその主な対象となっている。

（2）　土瓶形と急須形との区分は明確なものではなく、土器の大小、鉉の有無などによって行なわれていた。

（3）　分類結果の記載には、大別としての「類」の下位概念とし

て、急須形で口縁が内傾するものをA型、同じく急須形で口縁が外反するものをB型、さらにツボ形に近い形態となるものをC型として、それぞれA・B・Cの呼称を用いた。

文献

安孫子昭二　一九六九　東北地方における縄文後期後半の土器様式（石器時代九）

江坂輝弥・渡辺誠・高山純　一九六七　大間町ドウマンチャ貝塚（下北）

藤森栄一・武藤雄六　一九六三　中期縄文土器の貯蔵形態について（考古学手帖二〇）

藤村東男　一九六八　千葉県久方貝塚の追加資料（Archaeology三〇）

後藤勝彦　一九六二　陸前宮戸島里浜台囲貝塚出土の土器について――陸前地方後期縄文式文化の編年的研究――（考古学雑誌四八の一）

林謙作　一九六五　縄文文化の発展と地域性――東北――（日本の考古学二）

清野謙次　一九六九　羽後国北秋田郡沢口村藤株字高森堂の上遺跡（日本貝塚の研究）

甲野勇　一九三〇　青森県三戸郡是川村中居石器時代遺跡調査概報（史前学雑誌二の四）

同　一九五三　縄文土器のはなし

Morse, E., 1879: Shell-Mounds of Omori. (Memoirs of the Science Department, University of Tokio. Vol.1 Part 1)

中谷治宇治郎　一九二六　注口土器ノ分布ニ就テ（人類学雑誌四一の五）

同　一九二七　注口土器分類ト其ノ地理的分布（東京帝国大学理学部人類学教室研究報告四）

芹沢長介　一九六〇　石器時代の日本

清水潤三　一九五九　亀ケ岡遺蹟――青森県亀ケ岡低湿地遺蹟の研究

同　一九六六　是川遺跡

杉山寿栄男　一九二八　日本原始工芸概説

鈴木公雄　一九六九　安行系粗製土器における文様施文の順位と工程数（信濃二一の四）

Suzuki, K., 1970: Design System in Later Jomon pottery（人類学雑誌七八の一）

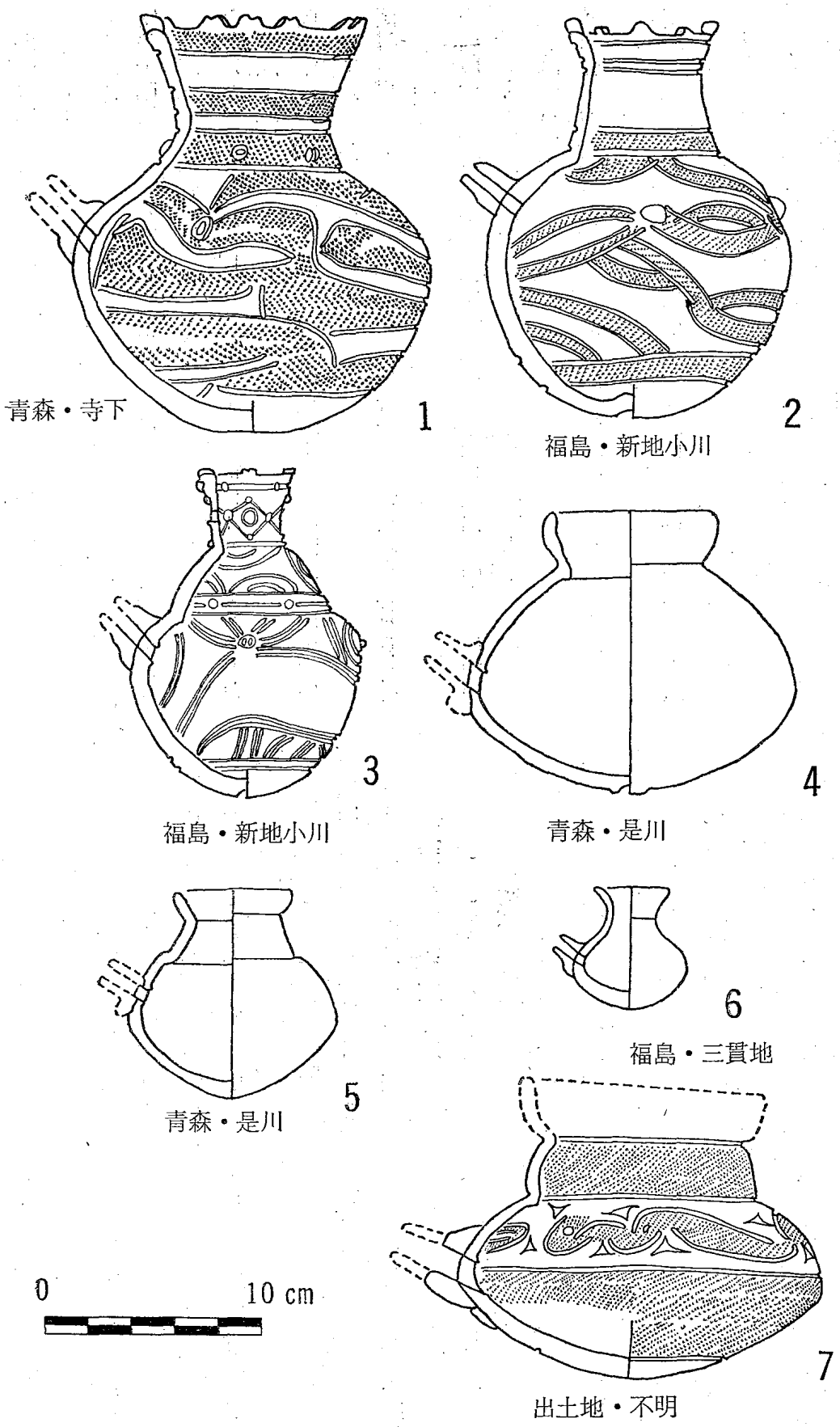
渡辺誠　一九六五a　勝坂武土器と亀ケ岡式土器の様式構造――東北地方の鍔付有孔土器を介して――（信濃一七の二）

同　一九六五b　縄文文化における抜歯風習の研究（古代学一二の四）

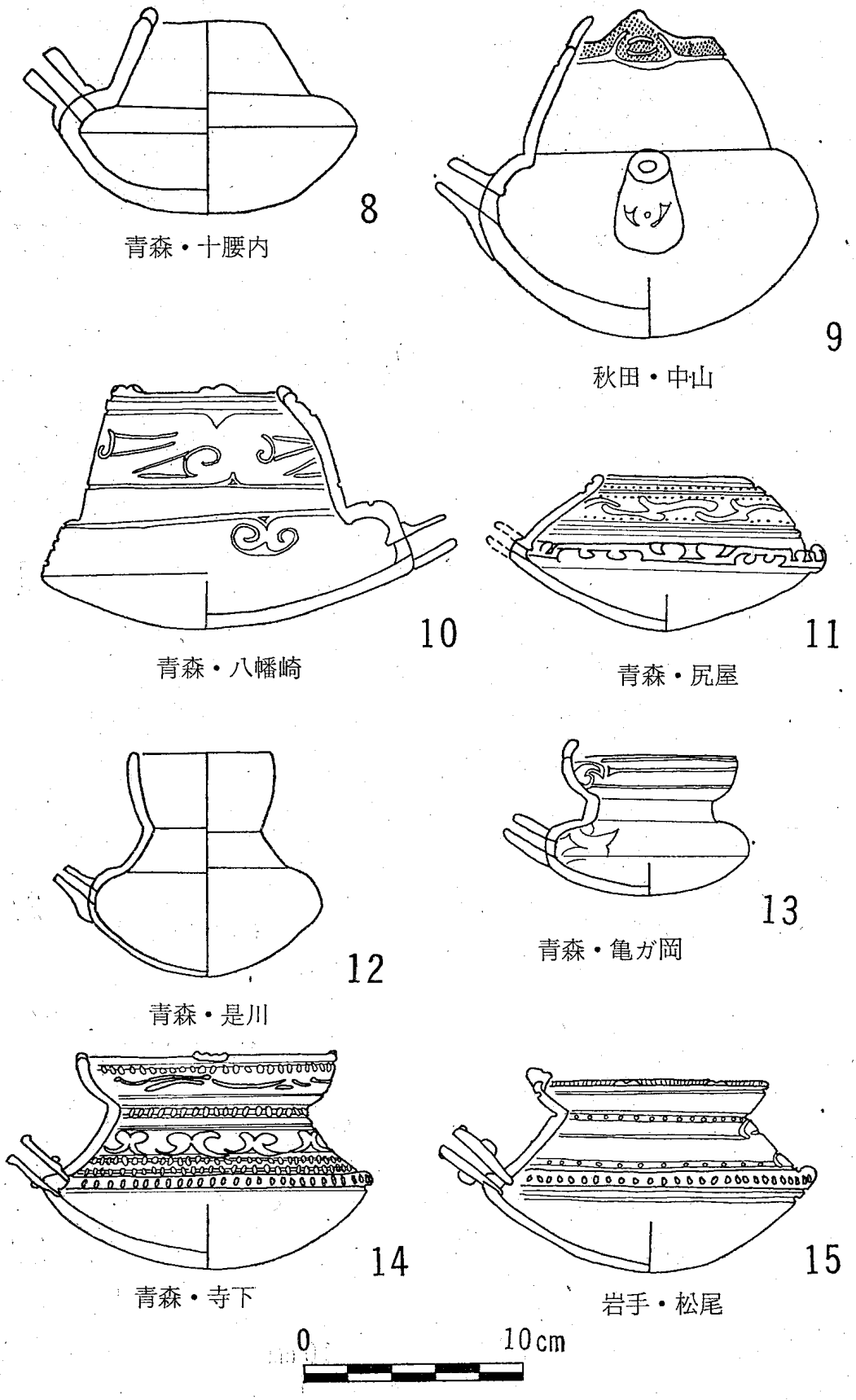
山内清男　一九三〇　所謂亀ケ岡式土器の分布と縄紋式土器の終末（考古学一の三）

同　一九三二　日本遠古の文化　Ⅲ縄紋土器の終末（ドルメン一の六・七）

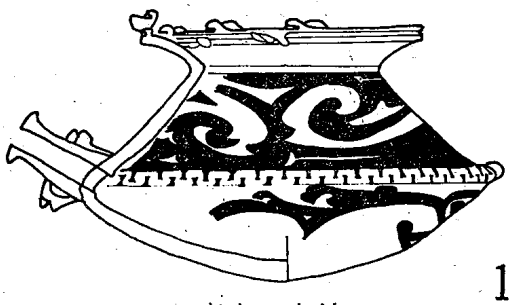
同　一九六四　縄文式土器総論（日本原始美術一）



第 一 図

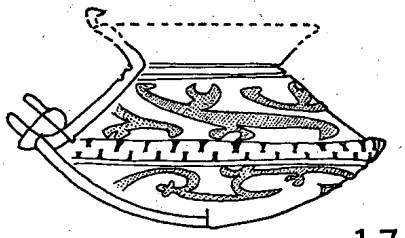

8
青森・十腰内
9
秋田・中山
10
青森・八幡崎
11
青森・尻屋
12
青森・是川
13
青森・亀ガ岡
14
青森・寺下
15
岩手・松尾
0
10cm

第　二　図



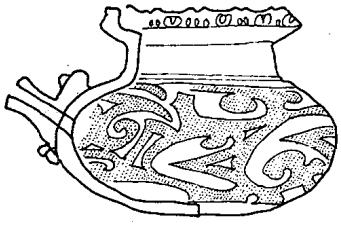
16

青森・宇鉄



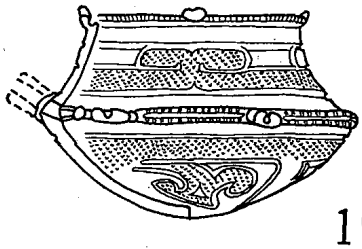
17

青森・宇鉄



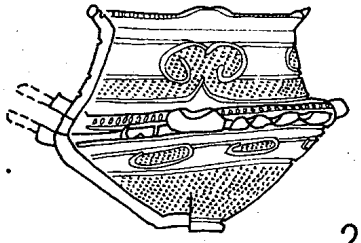
18

青森・亀ガ岡



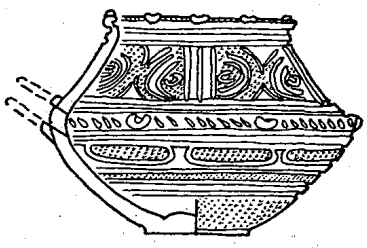
19

青森・是川



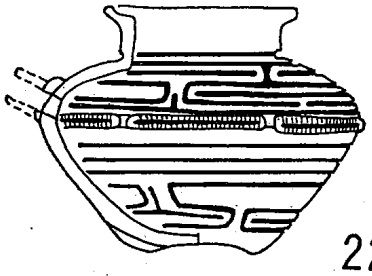
20

青森・是川



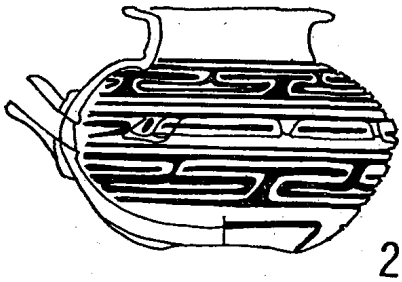
21

出生地・不明



22

宮城・山王



23

青森・亀ガ岡

0　10 cm

第三図